

ムバ・マリジャンのペティラサン インドネシアの 現代ジャワ社会における災害後の聖地と世界観の 変化

著者	Suhadi Cholil
雑誌名	東北宗教学
号	特集号
ページ	65-81
発行年	2023-03-31
URL	http://doi.org/10.50974/00136791

ムバ・マリジャンのペティラサン

—インドネシアの現代ジャワ社会における災害後の聖地と世界観の変化—

Suhadi Cholil

インドネシアは巨大な活火山を持つ国である。現在、国内には127もの活火山がある。過去に起きた1883年に起きたクラカタウ山の大噴火と1815年のタンボラ山の大噴火は、他国にも多大な影響を与えたため、世界的に有名になっている。一方、現代では、ジョグジャカルタ特別州と中部ジャワ州内のいくつかの県との境にあるムラピ山、東ジャワ州のケルド山という2つの火山が活発な活動を記録している。1945年のインドネシア独立後、クルド山の大きな噴火は1951年、1966年、1990年、2014年に起こっている。したがって、平均すると15年に1回噴火していることになる。本論文では、1548年以来70回以上の噴火を繰り返し、インドネシアだけでなく世界でも最も活発な火山として記録されているムラピ山に注目する (Mei, et.al. 2013)。

ムラピ山は、正確にはジョグジャカルタ特別州のスレマン県と、マゲラン県、ボヨラリ県、クラテン県などの中部ジャワ州の複数の県に跨っている。一般的に、ジョグジャカルタはムラピ山噴火の影響を最も受けた地域である。ジョグジャカルタの人口は約360万人であり、住民の多くは商人、観光業者、職人、公務員、農民として働いているが、ムラピ山の斜面周辺の住民のほとんどは農民や牛やヤギの飼育者として働いている。2010年のムラピ山噴火後、多くの若者が火山観光業に従事している。つまり、一般的には農耕社会といえる。住民は今でも非常に密接な社会的関係や絆を持っている。また、伝統的なイスラム教を信仰するとともに、地元のジャワ文化に近い様々な宗教儀式を行っている。人々は社会的行事（隣人の結婚祝いなど）、文化的行事（伝統芸能など）、宗教的行事（タハリラン／共同祈願など）などの際に共同体として集う。

ジョグジャカルタは、イスラム教や他の宗教が地元の伝統と強く融合した

ジャワニズムの中心地としても認識されている。ジョグジャカルタにおける宗教と文化の密接な関係は、ジョグジャカルタ宮殿と一般社会の両方において再現され続けている。ジョグジャカルタ宮殿は、1755年にスルタンのハメンクブウォノ1世によってジャワのイスラム教スルタンとして創設された。現在に至るまで、ジョグジャカルタ宮殿では、ジャワの伝統的な要素が非常に強いイスラムの儀式慣習が守られている。ジョグジャカルタには1912年にインドネシア第2のイスラム組織であるムハマディヤが設立されたが、ジョグジャカルタの村人のイスラム習慣には、イスラムとジャワの強い習合が今も反映されている。ムラピ山の管理人であるムバ・マリジャン (Mbah Maridjan) は、このジャワの宗教的・文化的環境の中で育った。その結果、彼はジャワのイスラム教徒として、地域社会から広く尊敬されるカリスマ性を築き上げたのである。

2010年、ムラピ山の噴火により350人の命が奪われ、甚大な社会的・経済的損失を被った。ムバ・マリジャンは2010年10月26日にキナレホの自宅の焼け跡で亡くなり、同時に村の34人がムラピ山からの火砕流に襲われて死亡した (Mei, et.al. 2013 : 359)。その4年前の2006年にも小規模な噴火で2名が亡くなっている。2010年、2006年とその前の年のムラピ山噴火に関する社会の文化的記憶は、ムバ・マリジャンのカリスマ的存在に言及してきた。そのカリスマ性は、彼が亡くなった家とその場所を、現在多くの人が訪れる災害後の場所へと変えている。

そのため、2010年の噴火後、ムラピ山の人々がどのようにして文化的な神話的慣習を維持しながら、同時に現代的な考え方で自然災害の存在と防災を捉えているのかを研究することは興味深い取り組みである。具体的には、以下のような問いを投げかける。第一に、ムバ・マリジャンを精神的な存在たらしめているものは何か？第二に、なぜムバ・マリジャンのペティラサン (petilasan) は災害後の重要な精神的存在として残っているのか？第三に、ムバ・マリジャンの文化的リーダーシップから彼の息子の文化的リーダーシップへの変容は、

人々による自然災害問題に対する理解とどのように関わっているのか？

尊敬を集めるムバ・マリジャン

ムバ・マリジャン（Mbah は文字通り翁、年寄りの意味）の愛称で親しまれるマリジャンは、1927年にムラピ山頂の南東7 kmにあるキナレホで生まれた（Bing 2018, 13）。父親はムラピ山の管理人（julu kunci）であった。若き日のマリジャンは、1970年にジョグジャカルタ宮殿からムラピ山の管理人助手に任命された。その後、父の死後、1982年3月よりムラピ山の管理人となった（Kompas, 10/27/2010）。ムバ・マリジャンはジョグジャカルタのスルタン（ハメクブウォノ9世）からパネウ・スラソハルゴ（Panèwu Suraksohargo）という宮廷の称号を得た。彼の主な仕事は、「山の良き守護者」（Quinn 2019 : 215）を意味するその宮廷名によってよく示されている。前述のように、彼は2010年10月26日、キナレホの自宅の焼け跡でムラピ山の火砕流に襲われて亡くなった（Mei, et.al. 2013 : 359）。

当時、土地がまだ非常に熱かったキナレホに埋葬することはできず、人々はムバ・マリジャンの遺体を死後2日後にキナレホから7.5km下にあるスルネンに埋めることにした（2019年12月19日 Mkm とのインタビュー、2014年11月18日に行われた観察）。ムバ・マリジャンは、後に家族が彼のペティラサンを建てた自宅で、平伏した状態で息を引き取った（2013年9月8日、アッシとのインタビュー）。

2014年のアチェの津波、2005年のジョグジャカルタの地震、2009年のパダンの地震など、インドネシアで大きな災害が起きた後、インドネシア政府は防災管理における科学のパラダイムを強調してきた。すると、合理主義的アプローチと超合理主義的アプローチの衝突が避けられなくなった。政府とムバ・マリジャンの緊張関係が生まれたのは、2006年にムラピ山が噴火した際のことであった。政府がムラピ山の危険な状況を発表し、人々を山の斜面から安全な場

所に避難させたとき、ムバ・マリジャンは避難を拒否した。彼によると、ムラピ山の精神と自然は、まだ彼にムラピ大噴火の兆候を与えていなかったのである。

幸いなことに、彼はそのムラピ山噴火の出来事において政府（ジョグジャカルタ特別州知事であるスルタン）に立ち向かうという「賭け」に勝った（Zainurrosyid 2013）。ムラピ山の火砕流により亡くなった人が2人いたが、その時のムラピ山噴火は大きくはなかった。しかし、2010年のムラピ山噴火の場合は逆であった。ムバ・マリジャンの妻や家族は避難所に避難していたが、2010年10月26日の午後、ムバ・マリジャンはキナレホの自宅に留まることを希望し、自宅が火砕流に襲われ亡くなった。そのムラピ火山の大噴火では、約151人が死亡した（Kompas, 2018年5月11日）。

彼の死後10年以上経っても、人々がムバ・マリジャンを強く尊敬していることは、とりわけ彼のペティラサン（記念地）を訪れる膨大な数の人々によって証明されている事実がある。人々がムバ・マリジャンを尊敬するのは、ムバ・マリジャンがムラピ山を守る仕事に対して非常に高いコミットメントを持っていたと見ているからである。民衆の間における言説のレベルでは、彼を尊敬する発言を簡単に見つけることができ、Tシャツ、民話の本や文章に彼の名が広まっている。ムバ・マリジャンのペティラサンにジャワ語で刻まれている文「ajining manungso iku gumantung ono ing tanggung jawabe marang kewajibane（人々の尊厳は、その義務に対する責任に依存している）」がその一例である。

また、ムバ・マリジャンに対する人々の高い信頼は、チャングリガンゴルフ場建設やムラピ国立公園の建設など、経済資本との対立により、農業活動を含む住民の生活が損なわれた際に、彼が大きな関心と弁護、支援を行ったことにも起因している。このように、人々はムバ・マリジャンの死を、避難を拒否したという側面からではなく、物理的な意味でのムラピ山、ムラピ山の精霊、

ムラピ山の人々の利益を守るために尽力したという視点から見ているのである。

災害後の精神的遺構としてのムバ・マリジャンのペティラサン

Petilasan は語彙的には「遺産」(<https://kbbi.kemdikbud.go.id/>)を意味し、基本的には修行をするための場所である (Mujab 2017 : 182)。死者の遺体が埋葬されている墓とは異なり、ペティラサンの下には誰かの遺体が埋まっているわけではない。誰かが滞在したことのある場所、誰かの死体が発見された場所、誰かが瞑想した場所など、様々な場所がある。日本では災害を記念して記念碑が建てられることが多いが、ジョグジャカルタでは、2010年のムラピ山噴火を記念してムバ・マリジャンのペティラサンが建てられたのである。

インドネシアの本島であるジャワ島には、多くのペティラサンが建てられている。例えば、東ジャワのクディリには、12世紀にクディリを支配したジャヤバヤ王を記念して、ジャヤバヤのペティラサンが建てられている。一般的なペティラサンの概念に沿い、ジャヤバヤ自身はペティラサン像に埋葬されていない。このペティラサンは最も訪問者の多い場所の一つであり、毎年ここで大きな式典が行われる (Julianti, et.al. 2021)。ジャワ島以外でも、人々は異なる現地の用語を用いて、同様の記念モニュメントを数多く建立している。一般的に、ペティラサンに付随する性格の一つは精神的な要素である。

前述のように、ムバ・マリジャンは2010年にムラピ山の火砕流に襲われ、キナレホの自宅が焦土と化した中で逝去した。そのため、家族や人々は、ムバ・マリジャンが亡くなった場所に「ムバ・マリジャン」のペティラサンと名付けた「モニュメント」を建てた。2012年6月に建てられたムバ・マリジャンのペティラサンは、2019年12月19日に筆者が訪れた際の撮った写真にあるように、地面と竹竿と簡易な屋根瓦のある小さな小屋だけで、まだ非常に簡素な状態であった。



(写真1：ムバ・マリジャンのベティラサンの内側)
写真提供元：筆者のコレクション

ムバ・マリジャンのベティラサンは、三つの部分から構成されている。まず、主要箇所であるムバ・マリジャンのベティラサンは、ムバ・マリジャンが亡くなったことを人々が発見した場所の目印となっている。マーカーの形状は、ジャワの伝統的な墓に似ている。加えて、ジャワの風習に沿った衣装で宮仕えをするムバ・マリジャンの写真や、ムラピ山を背景にしたムバ・マリジャンの大きな絵、ジョグジャカルタの王たちの写真、ムラピ祭りの写真、ムバ・マリジャンの服、火砕流で一部が焼失したコーランの本、ムラピ祭りの道具などが展示されている。

次に、ムラピ山の火砕流による被害を受けた収集物で埋め尽くされた家博物館がある。この収集物には、噴火時に住民を避難させるために使われた車、オートバイ、台所用品、家具、ガムラン（ジャワの楽器）、失われた動物の骨などが含まれている。最後に、集会所、小さな家屋、露店、モスクなど、いくつかの建築物が建てられている（2019年12月19日観察）。これらの建物の建設費用は、ジョグジャカルタ特別州政府が資金提供した集会所と、シャリア銀行

会社によって資金提供されたモスクを除いて、すべてムバ・マリジャンの遺族が賄っている（2019年12月19日、Mrn へのインタビュー）。この時点で、ムバ・マリジャンのペティラサンとムバ・マリジャンの家博物館は、家族的または個人的な財産であると言える。

現在、ムバ・マリジャンのペティラサンには、彼の墓よりも遥かに多くの人々が訪れている（2019年12月19日、Mrn とのインタビュー）。2019年12月19日（木）に観察を行ったところ、日中の約4時間の間にムバ・マリジャンのペティラサンを訪れた人は推定500人以上であった。インドネシアの全国メディアは、1日に約2000人がムバ・マリジャンのペティラサンを訪れたと述べている（Kompas, 2014年1月8日）。一方、ムバ・マリジャンの墓を訪れる人はごくわずかである。一部の人々は、主にムラピ山のラブハン（labuhan）儀礼の際に墓を巡礼している（2019年12月19日、Mrn とのインタビュー）。

人々は主に昼間に災害観光の目的でムバ・マリジャンのペティラサンを訪れており、主に夜間に行われる修行目的のために訪れる人はごくわずかであった（2019年12月19日の Mrn とのインタビュー、2019年12月19日の Mkm とのインタビュー）。この傾向は、ジャワ人ムスリムの間におけるシンクレティズムの実践の衰退、あるいは現代のインドネシアのムスリムにおいてイスラムが標準ではなくなっていることを意味している（Hefner 2011）。災害研究の目的からすると、膨大な数の人々が訪れるムバ・マリジャンのペティラサン現象は、文化的有形モニュメントの建設による災害記憶の物質化のベストプラクティスを表している（Boret and Shibayama 2017）。筆者の観察では、訪問者は起きた自然災害、ジャワの複雑な世界観、防災に関する認識について多くのことを学んでいる。

災害後の精神的遺構としてのムバ・マリジャンのペティラサンの存在は、彼に対する人々のカリスマ性と信頼から切り離すことはできない。彼は生前、

ジョグジャカルタのスルタンからムラピ山の管理人に選ばれた後、ムラピ山の精霊との交信を確立するなど、生涯をムラピ山の守護に捧げた。生前だけでなく、死後も人々から尊敬される存在であった。

ムラピ山の儀式

ジャワの村々では、「ジャワニズム」あるいはジャワの神秘的な領域と結びついた融合的な信仰と実践が盛んであり (Bertrand 2002)、ムラピ山周辺地域も例外ではない。ムラピ山周辺の集落によって行われるムラピ山のための儀式は数多く存在する。ここでは、人々の山への供養の実践を示すものとして、主に三つの儀式を取り上げる。

まず、最大の儀式であるジョグジャカルタにおけるムラピ山へのラブハン（奉納儀礼）が挙げられる。地元の人々は、ムラピ山のラブハンを、マタラム王国（現在のジョグジャカルタ王国とスラカルタ王国）の初代統治者パネンバハン・セノパティ（1575-1601）と南洋の女王の精霊ニヤイ・ラトゥ・キドゥルの愛の関係の神話と関連付けている。この話は、ムバ・マリジャンの息子であるパク・アシ（Pak Asih）から聞いた。Judith Schlehe（1996：393-398）とGeorge Quinn（2019：221-233）も、筆者が聞いた話と似たような話を記述している。いずれもムバ・マリジャンから直接聞いた話である。太陰暦に基づいて年に一度行われるムラピのラブハンは、ムラピ山の守護霊であるエヤン・サブ・ジャガドへの供養の儀式である。

ある日、セノパティはラトゥ・キドゥルから卵の贈り物を受け取った。セノパティはその贈り物を食べて霊になることを恐れていたため、使用人のジュル・タマンにそれを食べるように頼んだ。卵を食べた後、ジュル・タマンは突然巨人になった。その後、セノパティは新しい名前キャイ・サブ・ジャガドの下で、ムラピの霊の支配者として巨人ジュル・タマンをムラピ山に派遣した。彼の仕事は、マタラムの王国を保護し、溶岩がムラピの南側の領域に流れない



(写真2：ムラピ山における2017年ラブハンにおいて祈祷を率いるパク・アシ)
写真の提供元：ジョグジャカルタ SAR

ように保証することであった。その見返りとして、マタラム王国は毎年彼に供物を捧げ、それは現在もジョグジャカルタ宮殿によって保存されている。ムバ・マリジャンは、この神話を強く信じている。彼は、肉体的な仕事や合理的な仕事だけでなく、精神的な努力によってもムラピ山を守っていた。ムバ・マリジャンは、定期的に年間ムラピ・ラブハンが開催されるジャワ・ヒンズーの古代遺跡で瞑想する夜を過ごすことで知られていた。それは、ムラピ山山頂の下に最高のステージであるスリ・マンガンティの地域にあった。

ムラピのラブハンは毎年実施されている。一連のラブハンの儀式は数日間続き、ラブハンのピークは毎年30ラジャブ（ジャワ暦の第7月、ジャワ暦は太陰暦に従っている）に起こる。ムバ・マリジャンの時代も、彼が亡くなった後も、一般的に、ラブハンの供養は常に同じ時期に行われていたようである。多少の違いはあるが、ムバ・マリジャンの時代のラブハンの方が供え物（ウボ・ランベ）が充実していたようである。彼の時代、例えば1995年のラブハンでは、*sinjang*（腰布）*limar*、*sinjang*（腰布）*cangkring*、*semekan*（女性の上半身を

包む布) *gadhung mlati*、*semekan* (女性の上半身を包む布) *gadhun*、*dhesthar* (頭巾) *daramuluk*、*ses wangen* (香りつきタバコ)、*kambil* (ココナッツ) *watangan*、*sela* (香)、*yatra tindhih* (お金)、*lisah* (油)、*konyoh* (香水)、*paningset Udaraga* (シヨール) であった (Schlehe 1996 : 400)。一方、パク・アシの時代、例えば2016年のラブハンにおける供え物は *sinjang* (腰布) *kawung*、*sinjang* (腰布) *kawung kemplang*、*dhesthar* (頭巾) *daramuluk*、*dhesthar* (頭巾) *udaraga*、*semekan* (女性の上半身を包む布) *gadung mlati*、*semekan* (女性の上半身を包む布) *gadung*、*ses wangen* (香りつきタバコ)、*yatra tindhih* (お金)、*kampung* (シャツ) *paleng* から構成されていた (Media Indonesia, 21/02/2016)。

2000年と2021年の Covid-19発生時には、集会規制のためにラブハンの儀式は短く、数人しか参加しなかった。通常、ラブハンの儀式の行列は、少なくとも丸2日間続き、それは通常、数百から千人程度が出席していた。儀式は、ジョグジャカルタ宮殿の代表からムラピ山の管理人へのウボ・ランベ (供物) の受け渡しから始まる。宮殿からのウボ・ランベは、ある晩、キナレホのムバ・マリジャンのペティラサンの前にあるホール (ペンダバ) に置かれた。その広間で人々は夜な夜な一緒に儀式やお祈りをした。また、ラブハンの委員会では、そこでジャワの影絵芝居を催した。翌日、ウボ・ランベは、主な行事であるラブハンの儀式が行われるスリマンティ・ホールまで徒歩でパレードを行った。ムバ・マリジャンのペティラサンに近いホールからスリ・マンティのホールまでは、歩いて2時間ほどの距離である。徒歩の行列では、ムラピ山の管理人と宮殿の廷臣がジャワの民族衣装を着て先頭を歩いた。スリ・マンガンティのホールでは、管理人が祈祷や儀式、ラブハンの儀式を先導する。

ムラピ山のラブハンのほかに、ボヨラリ地区のムラピ山の斜面で行われる山のセデカ (供養と施し) とスレマン地区のムラピ山の斜面で行われるマルチ・プミ (台地の掃除) という、少なくとも二つの興味深い儀式があること

をここで述べておきたい。この二つの儀式活動は、ラブハン・ムラピの活動よりも小規模であるが、ラブハン・ムラピと同様に年に1回定期的に行われている。

山のセデカは、ボヨラリ県セロ小区レンコ村で行われた。セデカの目的は、住民が危険や災害から守られるように全能の神の保護を求めることである。山のセデカでは、人々はスラ（ジャワ暦の最初の月、1ムハラムのイスラムの新年と一致する）の1日に年に一度開催されるムラピ山の主な提供として、水牛の頭を提供する。この山のセデカの伝統は、人々が地域で土地（*babat alas*）を開く最初の人として信じているムバ・ペトルクの神話に言及している。彼は昔、ムラピ山への捧げ物として水牛の頭を作ったと信じられています。セデカは文化的なカーニバルであり、午前中に始まり、屠殺される水牛のパレードが行われる。一方、夕方に集まった住民は、ムラピ山の頂上にあるムラピのジョグロ（ホール）に水牛の頭を運ぶカーニバルを開催し、食べ物（*tumpeng*）と様々な要素（*ubo rampe*）と供物を持参した。ジョグロ・ムラピでは、委員会や政府代表の様々な挨拶の後、伝統的なリーダーが詠唱をリードし、祈りを捧げる。その後、用意された水牛の頭がムラピ山に捧げられた。

ムラピ山の斜面地域におけるもう一つの供養の儀式は、文字通り地球をきれいにすることを意味するマルチ・ブミである。この活動は、ムラピ山の斜面に住む住民によって組織されたもので、正確にはスレマン地区トゥリ小区ウォノケルト村トゥングララムの集落である。毎年、サパル（ジャワ暦2月）の21日に定期的に行われていた。場所は村のホールであり、イベントの主な活動は、ムラピ山災害の危険からの安全と保護を神に求めるための儀式と祈りである。さらに、イベントはまた、様々な芸術グループ（*bregada*）、地元の芸術と巨大な踊りから文化的なパレードで構成されていた。イベントの最後には、ジャティラン（馬）による舞いの披露も開催された。

20年前、30年前と比べると、人々は現在でも、供え物の詳細なども含め、ムラピ山への様々な儀式供養の伝統を守ろうとしているようである。しかし、ムバ・マリジャンの時代と比較すると、儀礼の解釈の仕方に変化が生じているようにも見える。ムバ・マリジャンは敬虔な人（イスラム教徒）であるが、ムラピの精霊に対する信仰は非常に強いものであった。ムバ・マリジャンの時代におけるムラピ山のラブハンは、「超自然界に好ましい影響を与え、人々とその周囲の環境のバランスを保つための儀式」（Schlehe 1996：398）として受け止められていた。この信念は、ムバ・マリジャンの息子であるパク・アシを含む、今日の新しい文化的指導者の間では薄れつつあるようである。パク・アシの時代には、ラブハンが「全能の神への感謝」の表現として認識されていた（Pemerintah Kabupaten Sleman, 2021年4月17日）。ムバ・マリジャンは神を信じる者であるが、同時にムラピ山のために捧げる供物や祈りは、ムラピの精霊を鎮めるためのものでもある（Ash, 2013年9月8日）。ムバ・マリジャンは儀式を通してムラピ山の精霊を「生きている」主体として認識し、ムバ・マリジャンは儀式を通して精霊とコミュニケーションを図ろうとしたのである。このような信仰は、ムラピ山周辺の新しい世代の間では消えてしまったようである。

転換点

ムバ・マリジャンの死は、彼の後任の管理人を誰にするかという大きな疑問を国民に抱かせた。ジョグジャカルタのスルタンが、ケジャウエン界の有力者であったマリジャンの友人パク・ポニミンではなく、ケジャウエンにほとんど関心を示さないマリジャンの息子アシを選んだことは非常に興味深い。彼は、地元の知識の名の下に、危険が生じた場合の災害避難手順に挑戦する可能性があることを認識されていた（Bing 2018：9）。

実際、ジョグジャカルタ宮殿のスルタン・ハメンクブウォノ10世は、最終的

にムバ・マリジャンに代わるムラピの管理人として、一般にパク・アシの愛称で親しまれているクリウオン・スラクソハルゴ・アシホノ（1966年生まれ）を指名した。パク・アシ自身、2003年からジョグジャカルタ宮殿の廷臣であった。実は、ムラピ山の新しい管理人は、前管理人の息子でなければならないという義務はない。これまでも、ムバ・マリジャン氏の管理人としての職務を補佐する宮廷人は何人もいた。パク・アシは世話役に選ばれる前に、世話役選考のすべてのステップを踏まなければならなかった。その選考を経て、2011年4月4日、スルタンはパク・アシをムラピ山の管理人に任命し、マス・ベケル・アノム・スラクソシホノという新しい廷臣の称号を与えられた。

パク・アシは、ムバ・マリジャンとムバ・ポニラ夫妻の6人の子供のうちの4番目である。故ムバ・マリジャンの妻であるムバ・ポニラはまだ存命である。ムラピ山の管理人のほか、大規模な私立大学であるインドネシア・イスラム大学の事務職員として働いている。ここがムバ・マリジャンと違う点である。ムバ・マリジャンは、ムラピ山の管理人であること以外に特定の機関で正式に働いているわけではなかった。現在、パク・アシと彼の家族は、ムバ・マリジャンのペティラサンがあるキナレホ村から南に約5 km離れたウンブハルホ村のカランケンダルにある2010年噴火後の住宅団地で暮らしている。パク・アシの妻と家族は、ムバ・マリジャンのペティラサンの近くで屋台を営み、食べ物やお土産を売っている。

2020年11月、ムラピ山で小規模な噴火があったが、この時の管理人であるパク・アシの対応や態度は興味深い。インタビュー動画 (<https://www.youtube.com/watch?v=32k6WfJZTxU>) を見ると、パク・アシの世界観や、ムラピ山噴火の予兆があったときに人々がどう振る舞うべきかがよくわかる。ムラピ山の状態の変化について尋ねられると、パク・アシは、警戒1、警戒2、警戒3などの段階など、科学的な自然災害軽減の用語や手段をしっかりと使っている。ムラピ山が噴火しようとしていることを示す兆候について、パク・アシは、

「溶岩流」、「暖かい空気」などの物理的な兆候に言及した。彼は、社会のサイン (ilmu titen) の知識に触れているが、彼が意味する ilmu titen は、自然の外側のサインである。「霊的な兆候はないのか」という質問に対しては説明しない傾向があり、かつてのムバ・マリジャンとは異なる立場をとっている。ムバ・マリジャンは、ムラピ山が噴火するかどうかを判断するために、ムラピの精霊と交信しようとしていた。

パク・アシはインタビューの中で、ムラピ山が噴火する兆候をより確実に知っているのは地質災害技術研究開発センター (BPPTKG) であり、より高度なツールを有していることを強調した。また、彼によると、市民は防災方法について科学的な測定に沿った意識も持っており、コミュニティが2010年の大噴火の経験から学んでいることも力説した。2020年11月のムラピ山噴火の際、コミュニティのスラメタンが行われたのかという質問に対して、パク・アシは、コミュニティはスラメタンではなく、アッラー (神) をお願いする共同祈願 (ドア・ブルサマ) を行い、すべての住民が安全で、誰も犠牲者にならないことを期待すると回答している。

この時点で、管理人のムラピ山や自然災害の存在に対する世界観が変化している。筆者の観察によれば、この転換は、今日の公的理性の発展をも表している。インドネシアの全国紙が、パク・アシのムラピ山に対する見解と防災について興味深い報道をしている。その記事の中に、「技術時代の管理人」と題した小見出しで、技術の発展に沿った防災に関するパク・アシの態度について述べている記述がある。また、人々の意識、特に若者の防災に対する考え方も書かれている。結論から言うと、一般的に、若者は BPPTKG の防災に関する技術に信頼を寄せている。しかし、先祖代々の慣習を尊重する伝統は守る必要があるとも言っている (Kompas 2020年12月20日)。このように、パク・アシと一般社会との間には、同等の世界観が存在するようである。

結論

インドネシアは巨大な活火山の国であり、ムラピ山はその中でも最も活発な火山の一つである。本研究は、宗教、文化、科学、自然災害軽減の間の複雑な関係を示している。2010年、ムラピ山の大噴火により、ムバ・マリジャンというムラピ山のカリスマ的管理者が亡くなり、350人の人々が命を落とした。本研究では、ムバ・マリジャンの文化的リーダーシップから彼の息子（パク・アシ）の文化的リーダーシップへの変容と、自然災害問題に対する人々の理解との関連について考察した。その結果、ムバ・マリジャンが生前において文化的指導者であったことを人々が強く評価しており、その結果、ムバ・マリジャンのペティラサンが災害後の重要な精神的な拠り所となっていることが明らかになった。彼の死後10年以上経った今でも、人々はムバ・マリジャンを強く尊敬しており、毎日多くの人々が観光や修行のためにこのペティラサンを訪れている。しかし、ムラピ山の新しい管理者と社会全体は、ムバ・マリジャンのムラピ山の霊に対する強い信念から離れようとしている。さらに、彼らはムラピ山、ムラピ山の噴火、防災管理を理解する上で、科学的な基準を打ち出している。そのため、本研究では、ジャワ島の宗教、文化、自然災害管理との関連で、ムバ・マリジャン以降および2010年ムラピ山噴火以降を新たな転換点として位置づけている。

参考文献

- Bertrand R., 2002. *Indonésie: La Démocratie Invisible: Violence, Magie et Politique à Java*, Paris: Karthala.
- Bing Jean-Baptiste. 2018. "Night-time in Java. "Thoughts on Merapi, Verticality and Paganism" in *Journal of Alpine Research*, Revue de géographie alpine, pp. 1-15.
- Boret, S.P. and Akihiro Shibayama, 2017. "The Roles of Monuments for the Dead During The Aftermath of The Great East Japan Earthquake", In *International Journal of Disaster Risk Reduction*, pp. 1-8.

- Hefner, Robert W., 2011. "Where have all the abangan gone? Religionization and the decline of non-standard Islam in contemporary Indonesia: The Politics of Religion in Indonesia" in Michel Picard and Rémy Madinier, *Syncretism, Orthodoxy, and Religious Contention in Java and Bali*, London and New York: Routledge.
- Mei, ETW., et. al. 2013., "Lesson Learned from the 2010 Evacuation at the Merapi Vulcano", In *Journal of Vulcanology and Geothermal Research*, 261, pp. 348-365.
- Juliati, I., I Nyoman Ruja, and Bayu Kurniawan., 2021. "Makna Simbolik Kirab Ritual 1 Suro di Desa Menang Kecamatan Pagu Kabupaten Kediri Jurnal Sandhyakala", Volume 2, Nomor 1, Januari.
- Mujab, S. 2017. "Understanding the Worldview of Abangan Practice: An Ascetic Case in *Petilasan* Eyang Srigati and Brawijaya V and Tapa Kungkum from Bumi Pertapaan Alas Ketonggo, Ngawi, East Java", in *Empirisma*, Vol. 26 No. 2 Juli, pp. 181-190.
- Quinn, G. 2019. *Bandit Saints of Java: How Java's Eccentric Saints are Challenging Fundamentalist Islam in Modern Indonesia*, Burrough on the Hill, Leics., UK: Monsoon Books Ltd.
- Schlehe, J. 1996. "Reinterpretations of Mystical Traditions. Explanations of a Volcanic Eruption in Java", In *Anthropos*, Bd. 91, H. 4./6., pp. 391-409
- Zaenurrosyid, A., 2013. "Maridjan Won the Bet (An Anthropological Analysis of Maridjan's Religious-Cultural Fight in 2006)", in *Jurnal Analisa*. Vol. 20 No. 02 December pp. 197-206.
- <https://kbbi.kemdikbud.go.id/entri/petilasan>

オンラインメディア

Kompas, 10/27/2010, "Inilah Alasan Mbah Maridjan Tidak Turun", <https://>

regional.kompas.com/read/2010/10/27/10344280/~Regional~Jawa
Kompas, 01/08/2014, “Petilasan Mbah Maridjan Dikunjungi Ribuan Wisatawan”,
<https://regional.kompas.com/read/2014/08/01/18380921/Petilasan.Mbah.Maridjan.Dikunjungi.Ribuan.Wisatawan>.
Kompas, 05/11/2018, “Infografik Riwayat Letusan Merapi Sejak1990an” <https://regional.kompas.com/read/2018/05/11/16523971/infografik-riwayat-letusan-merapi-sejak-1990-an?page=all>
Kompas, 20/12/2020, “Cerita Mbah Asih Sang Juru Kunci, Penjaga Pintu Gunung Merapi”, <https://regional.kompas.com/read/2020/12/20/07080001/cerita-mbah-asih-sang-juru-kunci-penjaga-pintu-gunung-merapi?page=all>
Media Indonesia, 21/02/2016. “Ritual Labuhan Merapi”, <https://mediaindonesia.com/humaniora/29775/ritual-labuhan-merapi>
Pemerintah Kabupaten Sleman, 17/04/2021, “Labuhan Merapi Wujud Doa Keselamatan Pada Tuhan”, <http://www.slemankab.go.id/12953/labuhan-merapi-wujud-doa-keselamatan-pada-tuhan.slm>
動画インタビュー： <https://www.youtube.com/watch?v=32k6WfJZTxU>
本論文で引用した写真2の出典
： <https://twitter.com/TRCBPBDIY/status/857855979639025665/photo/1>